

巻頭言

3つの拠点構想



附属学校教育局長
谷川彰英

AKIHIDE
TANIKAWA

今年は法人化5年目に当たる年です。特別支援学校の構想については、すでに「支援を必要とする子どもたちのために—特別支援教育 筑波モデル (Next 50)—」として外部報告会も終わり、具体的なアクションプランの作成に取りかかっています。普通附属学校の将来構想も次第に固まりつつあり、そこでは、筑波大学の附属学校の特色を次の3つにまとめて議論を進めています。

①先導的教育拠点 ②教師教育拠点 ③国際教育拠点

「先導的教育拠点」とは、教育実践について全国的リーダーシップをとっていく拠点となることを意味しています。また、「教師教育拠点」とは学内における教員養成のみならず現職教員研修などの拠点となることを、さらに「国際教育拠点」とは、全世界に対して教育実践研究に貢献することを意味しています。

これらの拠点構想は特別支援教育構想と矛盾するものではなく、2つの構想の筋道をどのように具現化していくかが今後の課題となってきます。

今年の大きな課題の1つは、平成21年度から実施される教員免許更新制への準備です。この制度はその規模において空前の一大事業になりそうです。全国で7~10万人近くの教員等を対象にした講習を実施するのは大変なことです。平成20年度は試行期間ですが、筑波大学としては「附属学校の教員の活用」と「視覚・聴覚障害者向けの講習」をテーマに掲げてその問題点を明らかにします。前者は附属学校及び教員をどのように講習にかかわらせるかを考えるものです。

直面する問題・課題は多いのですが、皆さんのご協力とともに明るい展望を拓いていきましょう。

目次

- 巻頭言
- 「科学の芽」賞
- 家庭科小中高一貫カリキュラム
- 普通附属学校の未来
- 指導教員の取組み
- 温故知新
- 退職のご挨拶
- 名物先生紹介
- 附属の今

3つの拠点構想 ●谷川彰英

第2回「科学の芽」賞表彰式・発表会の概要 ●篠原吉徳……………1

「四校研」家庭科分野の研究の取り組み ●木村範子……………1

附属小学校のこれまでとこれから ●坪田耕三……………2

附属中学校の未来を考える ●山口 正……………2

紫峰のことも 夢のまた夢? ●高澤耕一……………2

“6年間の自由空間”を世界に!~筑波大学附属駒場中・高等学校~ ●小林 汎……………3

普通附属学校の未来に期待して ●大平典男……………3

就学相談を行いました ●菅野和恵……………4

「経験領域表」—知的障害養護学校の教育内容— ●神田基史……………4

退職のご挨拶 ●皆川春雄……………5

附属坂戸高等学校の名物先生 —竹内義晴先生— ●大平典男……………5

国際教育協力拠点をめざして ●坪田耕三……………6

●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia (後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む)こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名(Paulownia imperialis)に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。



第2回「科学の芽」賞表彰式・発表会の概要

「科学の芽」賞実行委員会・附属学校教育局 篠原吉徳

平成19年度、第2回「科学の芽」賞には、全国24都府県及び海外4か国(日本人学校)から全部門合計で846件(個人802件、団体44件)、延べ921名の応募がありました(なお、今年の中学生部門には、1名の本学の附属視覚特別支援学校中学部の生徒が含まれています)。846件は、初回(平成18年度)よりも、全体で201件も多い数です。

以下に掲げる表は、今年度の受賞者数を示したものです。

受賞者数(件)

部門	小学生部門	中学生部門	高校生部門	全部門合計
件数	10(-)	9(1)	1(1)	20(2)

【注1】()内数値は、団体による応募者を指し、内数として示したものです。
【注2】奨励賞受賞件数は、全部門合計で20件、また学校奨励賞は5件でした。
【注3】受賞者氏名(在籍学校名を含む)、作品等は、「科学の芽」賞ホームページ(http://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/Site/start_files/kagakunome.html)に掲載されています。

さて、「科学の芽」賞の表彰式は、平成19年12月22日(土)、筑波大学学生会館特別会議室において、受賞者のご家族や担任の先生など関係者の方々も多数参列される中、挙行されました。岩崎洋一学長は手ずから、受賞者一人ひとりに、賞状を読み上げてから、賞状と記念品を授与されました。その後、岩崎学長は、受賞者を前に、「科学の芽」ということばに込められた、朝永振一郎博士の思いを語られるとともに、博士の偉業を称え、遺志を引き継ぐものである「科学の芽」賞の意義を説かれました。

続いて行われたのは、表彰式と並ぶ当日の大きなイベントである、受賞者による発表会です。ここで、各受賞者は、「科学の芽」賞実行委員会委員を務められた鷺見辰美先生、鈴木亨先生及び濱本悟志先生(いずれも、筑波大学附属学校の先生方である)によるインタビューに回答する形で、研究動機、テーマに取り組むことになった経緯、作品の特長、実験・観察における創意工夫、また、作品をまとめる過程で苦心したことなど、を披露してくれました。表彰式では緊張した面持ちでいた



受賞者も、気持ちがほぐれ、インタビュアーの問いかけに快活に受け答えをしていました。発表会の最後を飾ったのは、三津谷慎治君ら(青森県立三本木農業高等学校2年)によるプレゼンテーション、「植物の特性を活かした観賞用インビトロ・プランツの開発」の発表でした。

「科学の芽」賞実行委員の大高 泉筑波大学大学院教授は、総評として、次に掲げる趣旨・内容のお話をなされ、第2回「科学の芽」賞表彰式・発表会を締めくくられました。「物理学はもとより、化学、生物学の各分野から偏りなく応募があったので、後は、地球科学的テーマの作品が増えることを望む。身近な生活の中で抱いた疑問から発したテーマが多くあり、その着眼、発想を評価したい。応募作品は、学校での理科学習をさらに発展させたもので、領域が異なると専門家といえども理解が難しいほど内容が高度で、充実した研究となっていた。これらのことは、①厳格な条件制御をした実験的研究、②多数の標本を取り上げ、丹念に観察した観察的研究、③長期にわたる継続的で根気強いフィールドワークによる観察研究など、「不思議だ!?!」と意識されたことを解決するために採られた多様なアプローチ、また探究の仕方からも裏付けられるものである。」



「四校研」家庭科分野の研究の取り組み

附属学校教育局 木村範子

「四校研」とは、大塚地区にある附属小・中・高と大学の4つによる各教科教育研究を主とする研究組織のことである。家庭科分野では、2002年からこれまで一貫して、小・中・高一貫の家庭科のカリキュラム開発研究を行ってきた。

まず一つ目の柱が「家庭科の学習内容におけるアーティキュレーション(接続と区切り)に関する研究—小・中・高校生の家庭生活実態と家庭科学習内容に関する意識の関連を通して—」のテーマによるカリキュラム開発研究である。第一次調査(2002年実施、2003年分析)は、大塚地区附属の小3~高3を対象に、家庭生活実態と家庭科学習に対するニーズを明らかにする目的で行われ、「小・中・高一貫の家庭科カリキュラム(第一次試案)」が作成、実施された。第二次調査は、2004年に本附属の独自性と研究の一般化のために、児童生徒(大塚地区附属校、中高一貫校、公立校)、教師(国立大学教員、附属校、公立校)、保護者(大塚地区附属校)に調査を行い、2005年にかけて分析、

17年度末「小・中・高一貫の家庭科カリキュラム(第二次試案)」作成、18年度に実施、19年度にその成果と課題をまとめ、来年度のカリキュラム作成に活かすことになっている。

続く二つ目の柱が、18年度から取り組んでいる「異年齢による実践力を高め合う家庭科「交流」授業における学習方法の開発—簡単な1食分の調理実習を通して—」のテーマによる「小・中・高の合同授業」である。これらから「家庭科」の一貫カリキュラムにおける「教育的系統性」の方向性を確認することができたことは大きな成果であった。

男女及び異年齢の相互学習を一貫カリキュラムの中核としたカリキュラム開発と授業設計を「筑波モデル」の特徴として押さえ、今後もカリキュラムのバージョンアップと、その内実を豊かにする授業実践につながる〈協働〉研究の成果を皆で積み上げていきたい。